

『あやはべる』の歌 屋良健一郎

米川千嘉子『あやはべる』が第四十七回「逍空賞」に決まった（『角川短歌』六月号）。五十歳前後の女性の、人生を見つめる視線、家族へ注ぐ愛情が表れている歌が魅力だ。

- ・若者が車中よき香に傾ぎくればわたしの夢はと今も言ひたく
- ・ハイヒールで鋭くも働くことなくて歪まざるまま老いてゆく足
- ・友はみな親の世話して忙しくて踊りて消ゆる時計のこびと
- ・一首目、電車に眠る若者。何かに夢中であるがゆえの疲れ。それが作者にはまぶしい。二首目、OLとして働く別の人生への想像が「足」を中心に描かれていて面白い。三首目、親を世話する友人たちは、決まった時間に決まった事をし、家に拘束される。その様子を、時計から出て来て、またすぐに時計の中へ戻るからくり時計の人形に喩えた点がユニークだ。

- ・最後の試合終はりたる子のユニホーム洗へばながく赤土を吐く
- ・いつよりか恥づかしがらず髭を剃る息子がをりぬ五月の鏡
- ・われの手とわれより白い夫の手がいくども撫でて息子消したり
- ・ガスの火をほおつと弱めるしぐさなど見せて息子は一日で帰る

集中には、息子を詠んだ歌が多い。やや感傷に過ぎると思える作中にはあるが、掲出歌は「ユニホーム」「髭」「ガスの火」といったキーワードが子の成長過程をうまく伝えている。一首目、土が落ちきるまで「ながく」ユニホームを見つめ、息子の「最後の試

合」の時間に静かに寄り添う作者。三首目、四首目は一人暮らしを始めた息子を詠む。子の成長に対する母親の思いが感じられて印象深い。

- ・くるしむ衆生われら阿修羅を見たるのち青葉のなかへばらばらになる

- ・〈朱鳥〉の予言ありし世過ぎて二千年われら滅びの予言のなかに

ところで、この歌集には「われら」という語も散見される。一首目、「青葉のなかへばらばらになる」とあるので、「われら」は家族や友人など身の回りの人だけではなく、博物館を訪れた人々すべてを指していることが分かる。作者は、同時代に生きる人々との連帯感をもとに、人間というもの、あるいは現代社会の様相を詠む。

- ・だれも他人の運命を生きることできず匂ひのない瓦礫の映像を見る

- ・暑い地下暑い電車されど暑い浜でなくはげしく匂ふかなしい海ではない

- ・ベランダにも干すときに一枚のこの地³の果ての冷えは降りくる

しかし、連帯を不可能とする出来事もある。一首目、映像がテレビの向こう側の人々を同時代の「われら」と捉えることを拒絶する。そこにいるのは「他人」なのである。しかし、作者は、なんとかそれらの「他人」とつながろうとする。つながるために「匂い」を求めめるかのような二首目は、字余りが切実さを伝えている。日本を「一枚」の大地と捉える三首目なども、同時代の人々との連帯を求めるこの作者ならではの歌である。